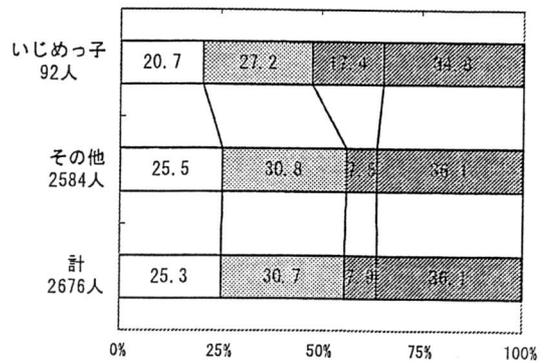


$\chi^2=1.561 > 1.424$ ($p=.70$)

□ I すなお ■ II まじめ ▨ III げんき ▩ IV とっぴ

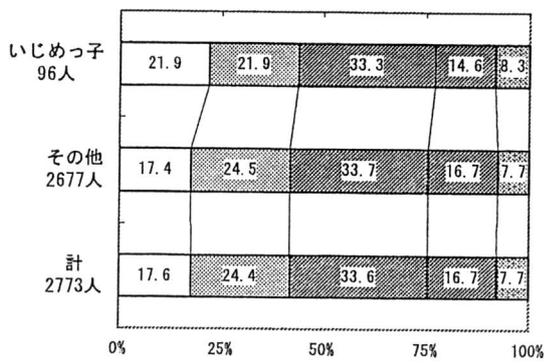
図21-1 いじめっ子といじめられっ子の類似人柄群別分布：%



$\chi^2=12.178 > 11.345^{**}$ ($p=.01$)

□ I すなお ■ II まじめ ▨ III げんき ▩ IV とっぴ

図21-2 いじめっ子と他の子の類似人柄群別分布：%



$\chi^2=1.63 > 10.64$ ($p=.90$)

□ 高 ▨ 中上 ▨ 中 ▨ 中下 ▨ 低

図21-3 いじめっ子とその他の子の精神健康度出現率：%

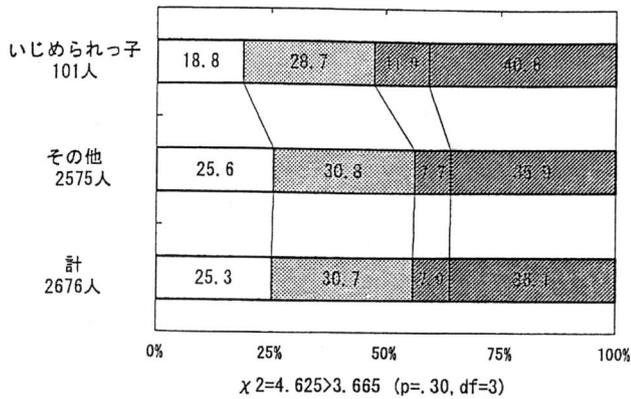
vi いじめっ子といじめられっ子

図 21-1 は、教師の目にとまったいじめっ子、いじめられっ子を類似人柄群別に集計したものである。いずれも、群間に差は認められなかった。いじめっ子もいじめられっ子も共通する性格特性を持つことが、春日 (1995) や小林 (1986)、桜井 (1987)、によって指摘されている。その共通点は、「自分に自信が無い」、「自己中心的」、「社会性に乏しい」、「自立性に乏しい」などで、いずれの人柄群でも不健康徴候として見られるものである。このために人柄群および精神健康度上の差が見られなかったと考えられる。

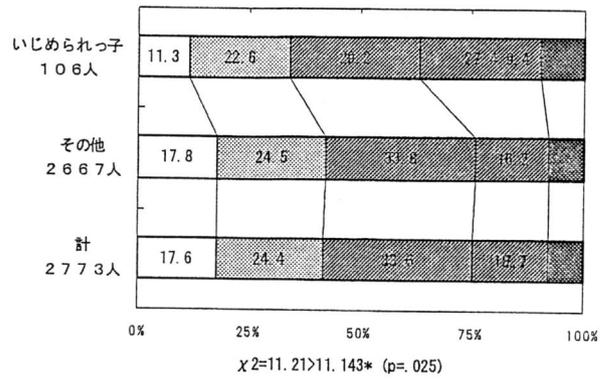
図 21-2 は、いじめっ子とその他の子どもの類似人柄群別比較である。分布に差が認められ、いじめっ子は、元気者のⅢ群が多かった。図 21-3 は、いじめっ子とその他の子どもの精神健康度別比較であるが、差は認められなかった。いじめっ子の

特徴として、攻撃的で非協調的 (古市、1989)、感情の起伏が激しい (春日、1987)、暴力や暴力的手段に訴えることを好み、衝動的で他人に優越したい欲求が強い (オルウェーズ、1995) などが知られている。他者に対する加虐行為も外向的なエネルギーを必要とする。いじめという行為は不健康徴候とも考えられるが、精神的健康度水準に関係なく、外向的な子の行動特徴の一つと考えてよい。

図 21-4 によって、いじめられっ子とその他の子どもの類似人柄群別比較を行ったが、分布に差は認められなかった。図 21-5 は、いじめられっ子とその他の子どもの精神健康度別集計である。いじめられっ子は、精神健康度が低+中下の子が多かった。いじめられっ子の一般的特徴として、おとなしく神経質で内向的であることなどが知られている (古市、1986; 古市、1989; 春日、1987,1995; オルウェーズ、1995; 杉原、1986)。しかし、このような受身的ないじめられっ子だけでなく、不安感と攻撃的行動様式が結びついた挑発的いじめられっ子がいることも指摘されている (オルウェーズ、1995)。協調性が無く自己中心的な子 (小林、1986) や理屈っぽく口の利き方が悪い威張っている子 (深谷、1996) もいじめられやすい。このように、いじめられっ子の特徴はさまざまであることから、特定の人柄の子どもが特にいじめられることはなさそうである。しかし、いじめられる子どもは精神健康度が低い。いじめられて不健康になるのか、不健康だからいじめられるのかは注意が必要であるが、いじめられっ子に見られる



□ I すなお ■ II まじめ ▨ III げんき ▩ IV とっぴ
 図21-4 いじめられっ子とその他の子の類似人柄群別分布：%



□ 高 ■ 中上 ▨ 中 ▩ 中下 ■ 低
 図21-5 いじめられっ子とその他の子における精神健康度出現率：%

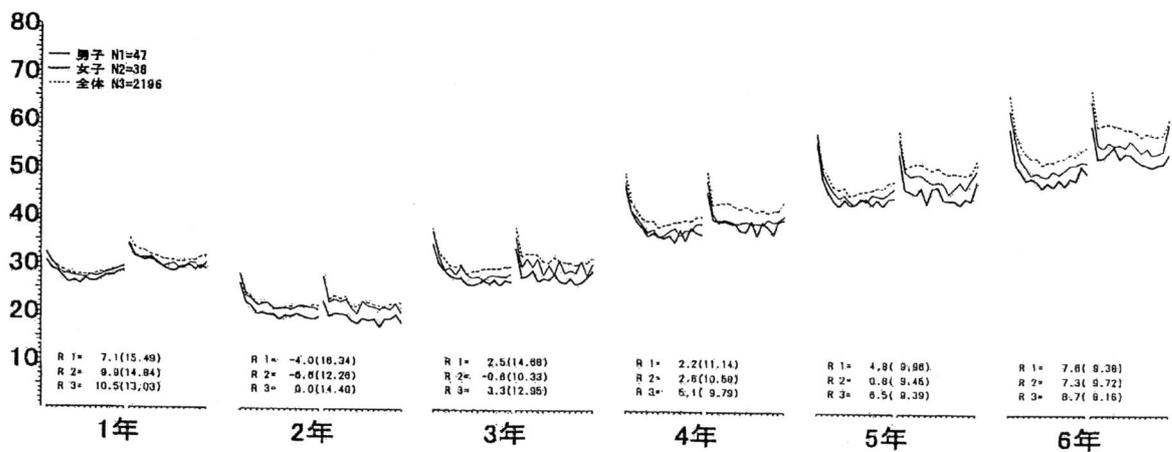


図21-6 いじめられっ子の性別学年別平均曲線

特徴は、一般的に不健康徴候を示す行動であると考えてよいであろう。

これまでの傾向はいじめられっ子の平均曲線(図21-6)にも表れ、全平均よりも作業量水準と休憩効果が低い。とくに女子は、2、3年に負の後期増加率を示し、5年次まで気弱な下降傾向を引きずり、男子よりもいじめられたことの影響が大きかった。

一方、図21-7に示したいじめっ子の男子は全平均と曲線が重なる。いじめっ子の女子は4年次から作業量と休憩効果が全平均よりも増し、意気盛んなどところがある。女子はいじめられて意欲や気力を失う一方、中学年以降はいじめて活気を保つ姿が認められる。

このようないじめ問題の中で、数は少ないが、いじめていた子どもがいじめられる側になったり、いじめられていた子どもがいじめる側になったり

する「いじめ・いじめられっ子」の存在が知られている(スミス・シャープ、1996)。「いじめ・いじめられっ子」は、いじめられっ子の特徴に加えて、衝動的・攻撃的でもあることが指摘されている(古市、1986)。このような、「いじめ・いじめられっ子」は、過去25年間に、該当者は4名(9はでやか型低度、8ぽつり型中上度、3-2なごやか型中下度、3-1ほがらか型中度)、そのうち躁鬱型系の3-1と3-2が全出席しており、平均曲線にその姿を残している(図21-8)。

二人の平均曲線を見ると、1年次は、スロースターターで行動の遅さが目立つ。2年次は、意欲減退を示す下降曲線が休憩効果の負値とともに明確に示され、両学年とも鬱状態である。この頃はいじめられる側であるが、3年次から初頭が出て、曲線の動き幅が拡大し、躁状態に移行する。3、4年次は、いじめっ子群やいじめられっ子群より

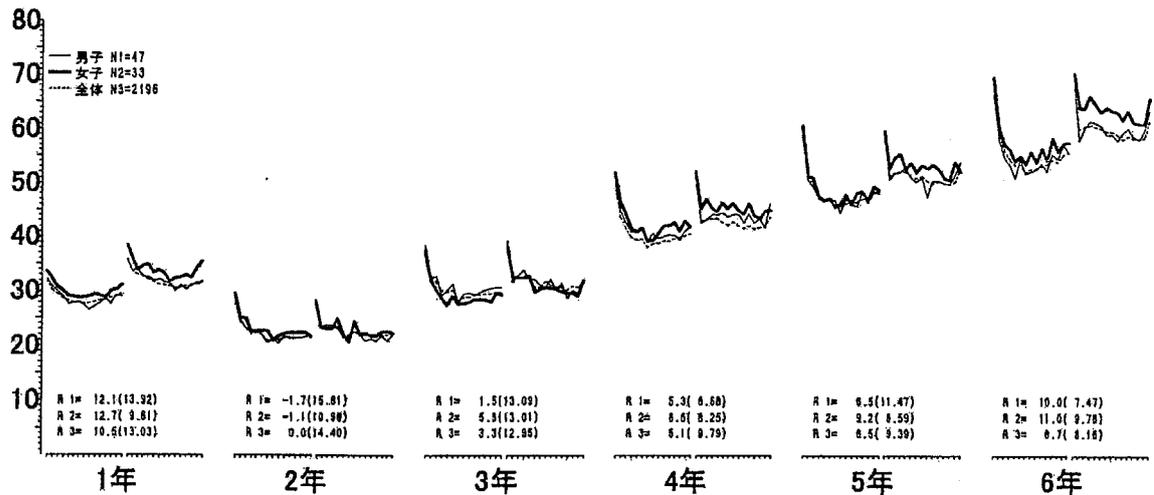


図21-7 いじめっ子の性別学年別平均曲線

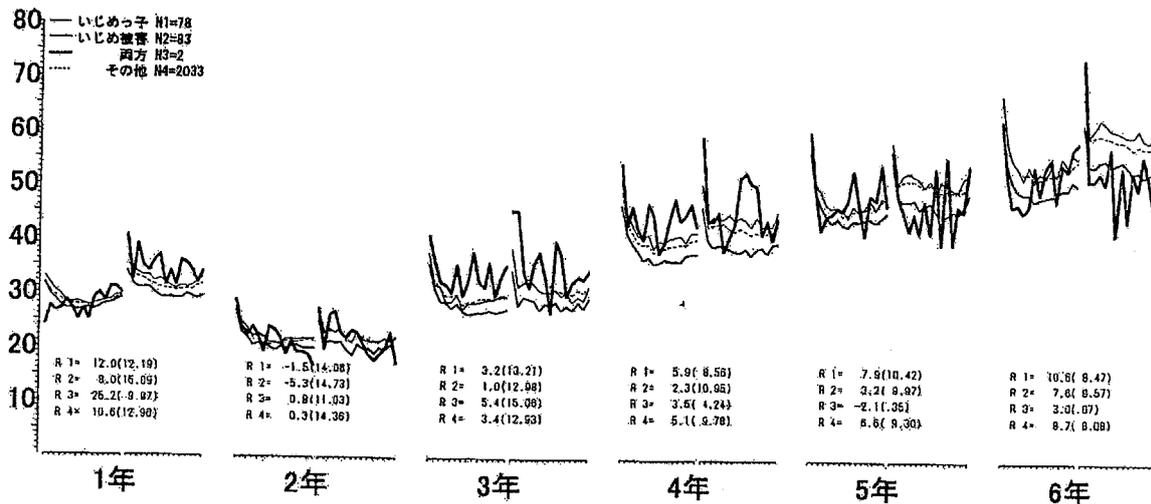


図21-8 いじめっ子・いじめられっ子両体験の児童の平均曲線

も休憩効果が高く、張り切っている。5、6年次は、曲線動揺が拡大して情緒不安定が顕著である。

3、4年次にいじめがあれば本人は意気揚々、5、6年次はいじめながら煩悶したり、気まが目立ったりということになる。

躁鬱系の子どもの中で、3・1 ほがらか型の出現率がいじめっ子 12 名に対していじめられっ子 4 名、やや多めであるが躁鬱型全体としては大差なく、精神健康度がとくに低いということもなかつ

た。

しかし、精神健康度分布に差がない点は注意が必要であろう。いじめて健康になる、あるいは、いじめられても健康を保つ心理をどのように理解するか。必ずしも不健康だからいじめ、いじめられて不健康になる場合だけではなさそうである。心のバランスをどこでとるか、教師サイドの教育観とは異なる子どもの実態がある点を踏まえておかなければなるまい。

5 発達特徴の年次推移

1) 25. 期別・学年別心的機能の発達特徴

25期・30年間のUKデータ統計を基準とした検討と同時に、四半世紀の年代推移を吟味しておく必要がある。本項は、巻末資料に示した昭和52年～平成14年度別の集計表を基として、5年単位で5期別経過に焦点を絞った。

図22の1～5はデータの揃った最初の卒業年次から5年ごとに区分した5期分の性別集計結果である。

第1期 S53～S57年度卒

555名：男児283＋女児272名

第2期 S58～S62年度卒

483名：男児241＋女児242名

第3期 S63～H4年度卒

555名：男児280＋女児275名

第4期 H5～H9年度卒

561名：男児282＋女児279名

第5期 H10～H14年度卒

581名：男児291＋女児290名

i) 平均曲線

集計開始の第一期から、全体的に2,196名の上位に女子の太線が位置し、男子の細線は平均以下、心的エネルギー水準＝作業量と精神的健康水準＝休効に性差が認められる。その傾向は3期まで続くが、4～5期には性差が消え、5期に至っては全平均よりも男女両曲線が下位に停滞し始めた。これは付属志向児童の中で、中学校進学時に学業成績の下位1/3が公立中学校へ進んだ前半期と比べて、ここ10年では特に優秀な生徒の中で私立進学校を目指す例が出始めており、その結果が反映されているのではなかろうか。全平均によって示された性差が期別進行の過程で消えつつある背景に女子優秀児の流出による作業量の低下現象がある。とすれば義務教育年齢における競争社会への適応の厳しさを示す例ともいえよう。

図22-6は5期別発達経過を比較したものである。男女を込みにした平均曲線の経過は2年次の下降傾向が徐々に消えて、健常者常態平均曲線へと近接する経過が見える。その中で全体傾向から

離れて目にとまる特徴として、低作業量水準を示す1年次の2期・中太線、2・3年次の1期・細線、4・5・6年次の5期・2点鎖線がある。1・2期は、低学年時に低作業量水準からスタートしても6年次には全平均を凌駕するのに対して、2年次の4期・破線の高作業量は6年次に全平均と同水準になるので、5期の4年次以後の低作業量と同じく発達の停滞を示す。これも調査開始当初と昨今では、学校への適応も実態が異なることを意味しよう。

ii) 精神健康度

図22-7に見るように、精神健康度は5段階区分では、中度判定が多く、両端の少ない分布であった。これを3段階別区分で見ると、大方の期において、高>中>低の比較関係が成立する。その中で低度群は4期から増加し始めた。高度群は2期を頂点に減少し続けたが最終的には1期と同水準と変わらなかった。最終5期において高度38.9%が3分類の中で最も高く、低度29.1%と中度32.0%との差がなくなった点は、平均曲線と同様に、近年の停滞振りを示すものである。性差は、各期において高度は女子>男子、低度は男子>女子を示したが、4、5期の高度群は女子出現率が低下し、性差を失った。この点も近年における心的発達水準を示すものといえよう。

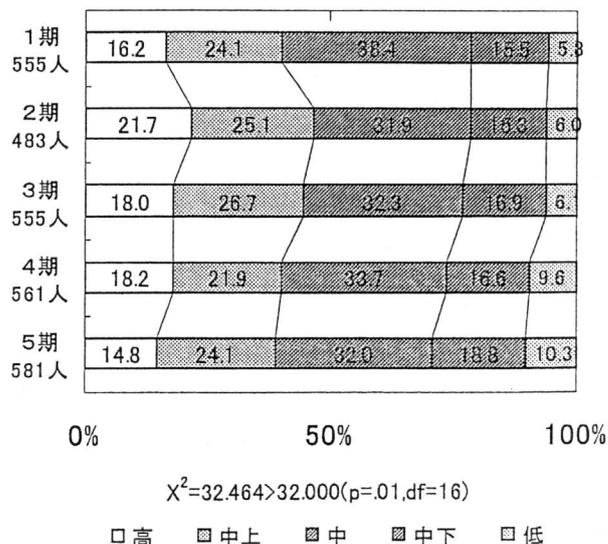


図22-7 期別精神健康度出現率：%

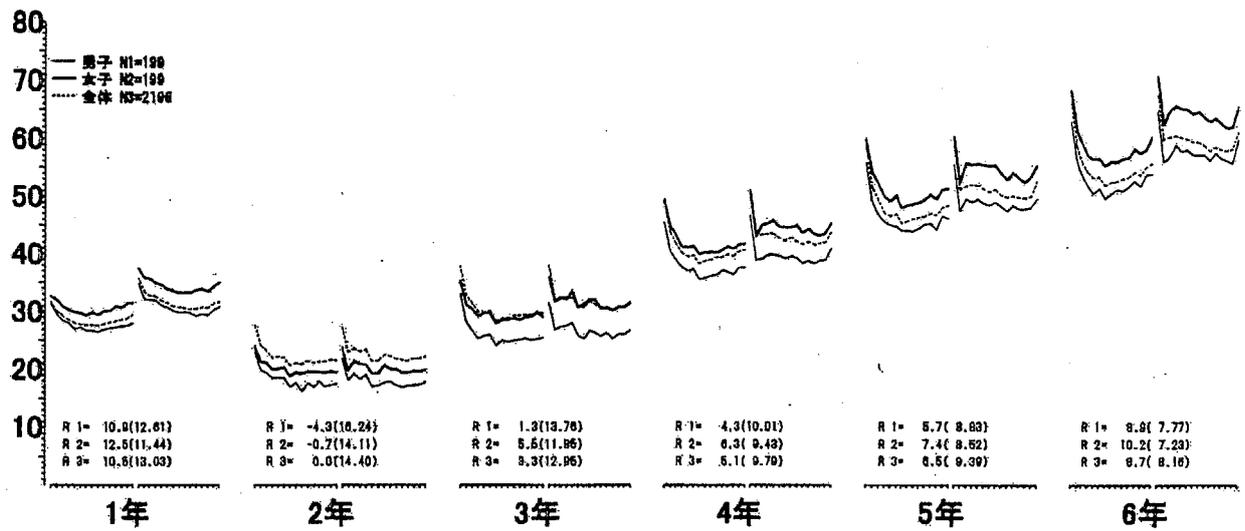


图 2 2 - 1 5 期別性別発達特徴：第 1 期

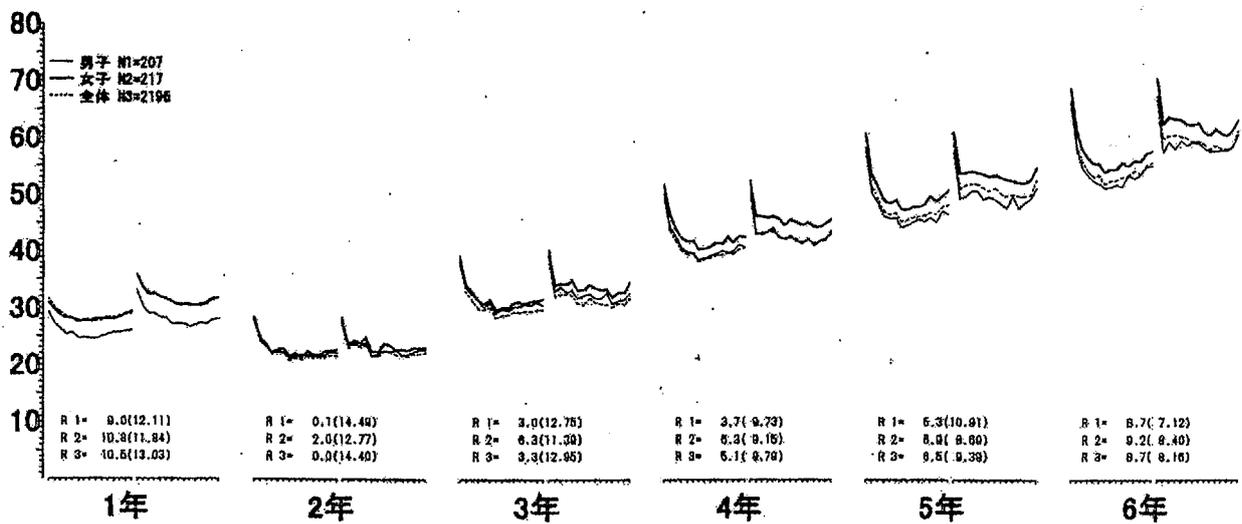


图 2 2 - 2 5 期別性別発達特徴：第 2 期

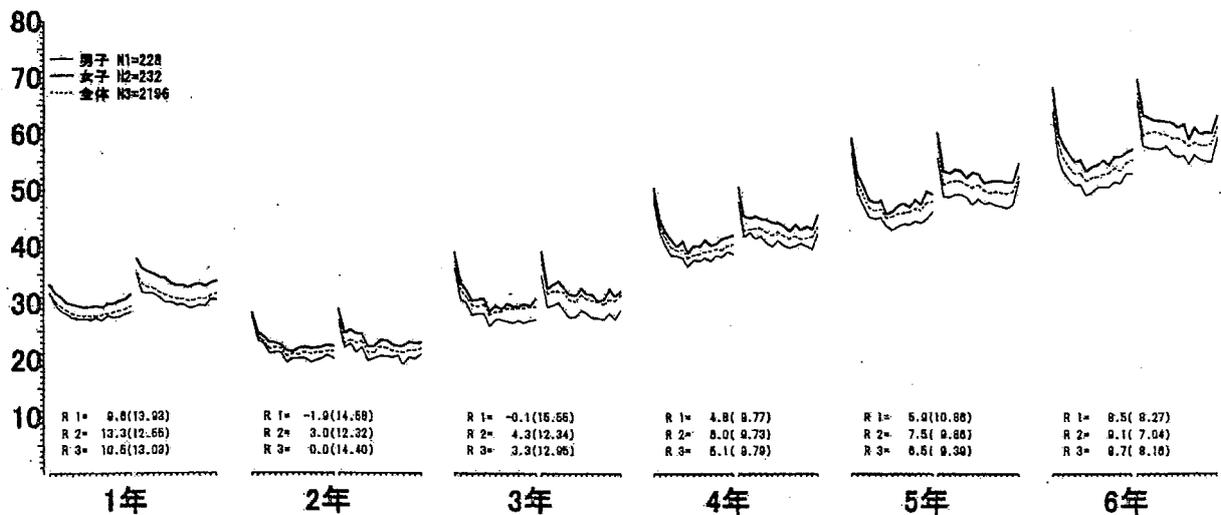


图 2 2 - 3 5 期別性別発達特徴：第 3 期

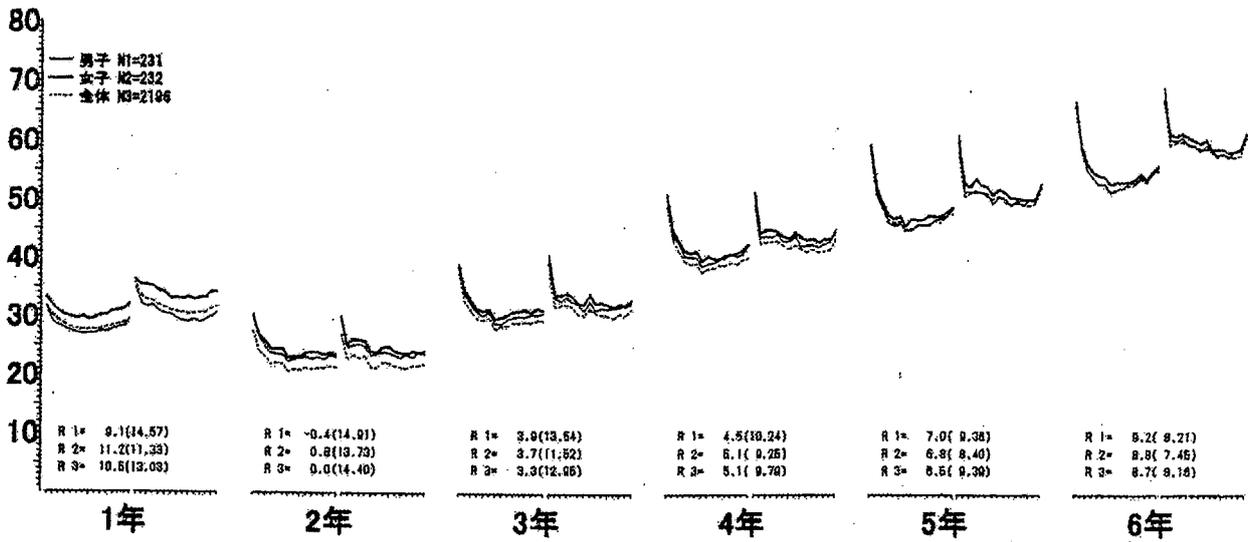


图 2 2 - 4 5 期別性別発達特徴：第 4 期

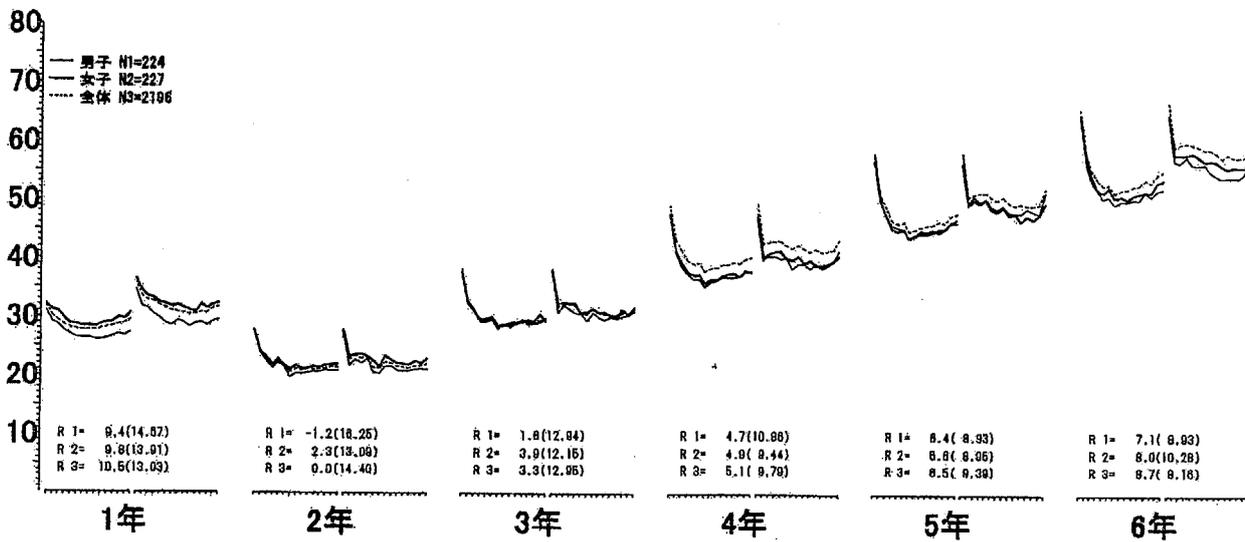


图 2 2 - 5 5 期別性別発達特徴：第 5 期

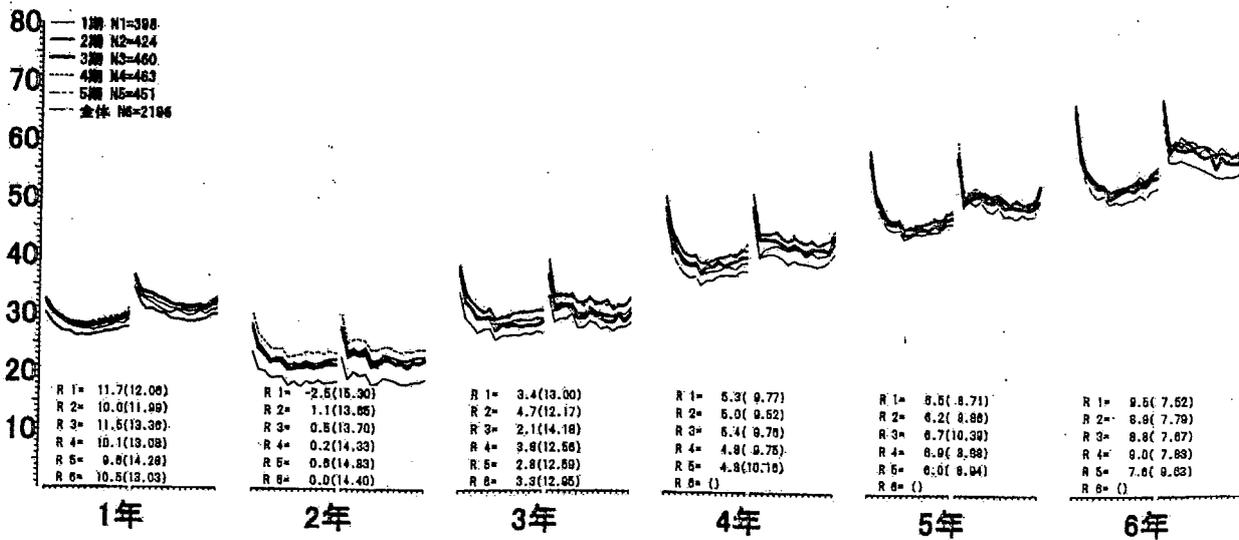


图 2 2 - 6 5 期別性別発達特徴：全期比較

表2 期別類似人柄群別分布

第1期

類似人柄群	精神健康度	該当人数(%)と平均曲線																	
		男子					合計	女子					合計	男女合計					合計
		高	中上	中	中下	低		高	中上	中	中下	低		高	中上	中	中下	低	
I すなおな子	1.2,3-2.7	14	22	28	13	1	78	18	14	33	4	1	70	32	36	61	17	2	148
II まじめな子	3-1d,5,10	8	19	37	16	3	83	23	31	47	9	2	112	31	50	84	25	5	195
III げんきな子	3-1,4,6	5	6	13	10	1	35	3	3	4	3	2	15	8	9	17	13	3	50
IV とっぴな子	8,9	6	12	25	18	14	75	9	17	19	11	8	64	15	29	44	29	22	139
V 循環型	3-4	3	4	4	1		12	1	6	3	1		11	4	10	7	2		23
合計		36	63	107	58	19	283	54	71	106	28	13	272	90	134	213	86	32	555
比率		12.7	22.3	37.8	20.5	6.7	100.0	19.9	26.1	39.0	10.3	4.8	100.0	16.2	24.1	38.4	15.5	5.8	100.0

第2期

類似人柄群	精神健康度	該当人数(%)と平均曲線																	
		男子					合計	女子					合計	男女合計					合計
		高	中上	中	中下	低		高	中上	中	中下	低		高	中上	中	中下	低	
I すなおな子	1.2,3-2.7	18	18	21	11	6	74	22	18	23	12	2	77	40	36	44	23	8	151
II まじめな子	3-1d,5,10	14	18	24	7	1	64	17	37	26	8	3	91	31	55	50	15	4	155
III げんきな子	3-1,4,6	3	2	4	5	2	16	1	3	1	1	4	10	4	5	5	6	6	26
IV とっぴな子	8,9	13	14	31	16	8	82	14	11	18	12	2	57	27	25	49	28	10	139
V 循環型	3-4	1		4			5	2		2	2	1	7	3		6	2	1	12
合計		49	52	84	39	17	241	56	69	70	35	12	242	105	121	154	74	29	493
比率		20.3	21.6	34.9	16.2	7.1	100.0	23.1	28.5	28.9	14.5	5.0	100.0	21.7	25.1	31.9	15.3	6.0	100.0

第3期

類似人柄群	精神健康度	該当人数(%)と平均曲線																	
		男子					合計	女子					合計	男女合計					合計
		高	中上	中	中下	低		高	中上	中	中下	低		高	中上	中	中下	低	
I すなおな子	1.2,3-2.7	11	18	22	13	2	66	19	10	18	6	1	54	30	28	40	19	3	120
II まじめな子	3-1d,5,10	10	21	22	12		65	13	25	26	10	2	76	23	46	48	22	2	141
III げんきな子	3-1,4,6	4	2	9	7	3	25	3	3	7	6	1	20	7	5	16	13	4	45
IV とっぴな子	8,9	10	25	38	25	15	113	24	37	26	15	9	111	34	62	64	40	24	224
V 循環型	3-4	4	1	5		1	11	2	6	6			14	6	7	11		1	25
合計		39	67	96	57	21	280	61	81	83	37	13	275	100	148	179	94	34	555
比率		13.9	23.9	34.3	20.4	7.5	100.0	22.2	29.5	30.2	13.5	4.7	100.0	18.0	26.7	32.3	16.9	6.1	100.0

第4期

類似人柄群	精神健康度	該当人数(%)と平均曲線																	
		男子					合計	女子					合計	男女合計					合計
		高	中上	中	中下	低		高	中上	中	中下	低		高	中上	中	中下	低	
I すなおな子	1.2,3-2.7	21	12	32	7	2	74	18	14	26	6	1	65	39	26	58	13	3	139
II まじめな子	3-1d,5,10	7	15	21	8	2	53	21	28	36	10	2	97	28	43	57	18	4	150
III げんきな子	3-1,4,6	2	2	6	10	6	26	3	2	10	6		21	5	4	16	16	6	47
IV とっぴな子	8,9	18	26	29	26	23	122	10	20	23	16	17	86	28	46	52	42	40	208
V 循環型	3-4	2	1	2	2		7	3	4	2	1	10	10	2	4	6	4	1	17
合計		50	56	90	53	33	282	52	67	99	40	21	279	102	123	189	93	54	561
比率		17.7	19.9	31.9	18.8	11.7	100.0	18.6	24.0	35.5	14.3	7.5	100.0	18.2	21.9	33.7	16.6	9.6	100.0

第5期

類似人柄群	精神健康度	該当人数(%)と平均曲線																	
		男子					合計	女子					合計	男女合計					合計
		高	中上	中	中下	低		高	中上	中	中下	低		高	中上	中	中下	低	
I すなおな子	1.2,3-2.7	16	15	16	8	4	59	8	20	17	5	1	51	24	35	33	13	5	110
II まじめな子	3-1d,5,10	10	13	24	10	3	60	21	31	40	13	1	106	31	44	64	23	4	166
III げんきな子	3-1,4,6	3	2	11	9	3	28	1	5	4	2		12	3	3	16	13	5	40
IV とっぴな子	8,9	13	23	30	36	30	132	11	29	37	20	16	113	24	52	67	56	46	245
V 循環型	3-4	3	4	3	2		12	1	2	3	2		8	4	6	6	4		20
合計		45	57	84	65	40	291	41	83	102	44	20	290	86	140	186	109	60	581
比率		15.5	19.6	28.9	22.3	13.7	100.0	14.1	28.6	35.2	15.2	6.9	100.0	14.8	24.1	32.0	18.8	10.3	100.0

表3 分析項目別UK結果

分析項目	人柄型判定	精神健康度判定	
	類似人柄群 4群	健康度 5分類	健康度 3分類
総数	IV>II>I>III		
男		計低>	計低>
女		計高>	計高>
1おだやか型		女低>	女低>
2こまやか型		女高>	女高>
3-1ほがらか型			6年次同比 4・5年次<低
3-1dじっくり型		女高>	女高>
3-2なごやか型		女高>	女高>
3-4循環型		4年次以降男女並行	4年次以降男女並行
4したたか型			
5しっかり型		4年次以降高>	4年次以降高>
6さわやか型		中下+低>	中下+低>
7しなやか型		計高>	計高>
8ほつり型		女高>	男4・5年次低> 女6年次高>
9はでやか型		計低順増	計低順増
10きっちり型		女高> 男低>	女高> 男低>
運動優秀者		計高> <5・6年次男高	多 高+中上> >低+中下
運動遅滞	IV> >II	<男低 男高<	<男低 男高<
学業優秀		>一般	計高>
学業運動優秀		最高	高+中上> >低+中下
身体 大	躁鬱型>	高+中上>中下+低	高+中上>中下+低
身体 小	躁鬱型>	高+中上<中下+低	高+中上<中下+低
肥満		高+中上>中下+低	計低>
病虚弱	VII>	中下+低>	
芸術傾向	II>IV	高+中上>中下+低	高+中上>中下+低
学業、運動、芸術	I>IV	計高>	計高>
附中進学	I>IV	高+中上>	高+中上>
附外進学			低+中下>
発言 多	I・III>	計高>	高+中上>
発言 小		計低>	計低>
アイデア豊かな子		高+中上>中>中下+低	高+中上>中>中下+低
行動の遅い子	II<IV	計低>	計低>
整理整頓不可	I・II<IV	女高無 <女低	女高無 <女低
友達 多い	女I>	高+中上>中下+低	高+中上>中下+低
友達 少ない	女IV<	中下+低>	中下+低>
いじめっ子	III>		
いじめられっ子		計低>	低+中下>
項目数	15	36	41

備考
不等号は該当数の多少を示す。

分析項目	平均曲線			その他
	体顔効果 後期増加率	心的エネルギー水準 作業量	曲線傾向 上昇・下降・平坦	
総数				
男	計低>	計少>		初頭出ない
女	計高>	計多>		初頭出る
1おだやか型	女低>	女低>		
2こまやか型	女高>	女多>		
3-1ほがらか型	計少>	計少>		
3-1dじっくり型	女高>	男少>	男下降>	
3-2なごやか型	女高>	女多>		
3-4循環型	5・6年次高>	4年次以降男女並行		
4したたか型	全少>	計少>		
5しっかり型	女4年次以降高>	女多> 男4年次から多>		
6さわやか型	男少>	男少>		
7しなやか型	計高>	計多>		
8ほつり型	女高>	女多>		
9はでやか型	計低>	男少>		
10きっちり型	女高> 男低>	2・3年次男少>		
運動優秀者	計高> 女<男	多> 5・6年次男多>		
運動遅滞	計低>	計少>	男下降>	
学業優秀	計高>	計多>		
学業運動優秀	最高	最多		初頭顕著に出る
身体 大	4年次まで女> <男	計多> 女>		
身体 小	女>	計少> 女<	計4年次まで下降>	
肥満	計低> <男低	計少> 男少	計5年次まで下降>	
病虚弱			ほつり下降>	曲線動揺大
芸術傾向	女高>	女多>	前期中半から男上昇>	学芸運=学運>学=芸 学=運芸>運=芸
学業、運動、芸術	計高> 女高>	計多>		
附中進学		計多> 女多>		
附外進学			計下降>	
発言 多	計高>	計多>		男> 初頭出る
発言 小		計少>	計下降>	女>
アイデア豊かな子				
行動の遅い子	計低>	計少>	計下降>	男>
整理整頓不可	計低>	計少>	女下降>	
友達 多い	計低>	計多>	計上昇>	
友達 少ない	計低>	計少>	計下降>	女>
いじめっ子	女4年次以降>	女4年次以降>		
いじめられっ子	計低> 2・3年次低>	計少>	女下降>	
項目数	36	39	13	10

iii) 類似人柄群別分布

表2より、人柄群別分布に期別差異が認められる。元気な子Ⅲ群の少ない集団であるが、最頻度が1期の真面目なⅡ群から5期のⅣ群自分流儀の子、とっぴな子へ移行した。

性差は第3期を除く計4期に認められ、女子に真面目なⅡ群が、男子に突飛なⅣ群と元気なⅢ群が多い全体傾向と同じであった。

以上のように、個性理解に基づく生徒指導に用いたUK資料から、児童期の心理的発達特徴を捉えてきた。分析はまだ緒についたばかりであるが、これらの結果の概要を示すと表3のとおりである。縦軸の分析小項目37項に対する横軸7項目ごとに差の確認された結果を整理した。計190件の有意差検出事項は分析項目ごとに性差を中心として類似人柄群間差、精神的健康度水準差が明らかであった。平均曲線から得られた結果とともに纏めると児童の発達特徴は3大項目12特徴に収斂した。

6 まとめ

本研究の特色は、同一小学校で精神作業検査を30年間継続し、1年次から6年次までの心理的発達過程を実測値で捉えたところにある。その中で、児童期の発達特徴として

1) 全体的発達特徴

i 全学年を通じて女兒の発達水準が男児よりも高かった。

ii すべての児童が自然発達するが、精神的健康水準の高い児童は高いレベルで安定し、低い児童は低いところで安定していた。

iii 環境適応は個性によって異なり、素直な子や真面目な子が順調に発達するのに対して、元気な子や突飛な子は変動が大きかった。

iv 発達阻害や不適応行動を示す児童の心理的特徴は、気力不足と意欲の減退が著しかった。

v 社会的に高い評価を受ける子の精神的健康水準は高い。逆に低い評価を受ける子は心的エネルギー水準が低く、不健康徴候を低学年次から示した。

2) 身体的特徴と身体行動に関する発達特徴

i 病虚弱児に始まり、身体が小さく、運動遅滞を示す児童は精神的健康水準が低いのに対して、肥満児は普通児と変わらなかった。

ii 体が大きく運動が優秀な児童は、高健康を示した。

iii とくに、学業・芸術に加えて運動の優れた子の健康水準は高く、運動の精神発達に及ぼす影響が大きかった。

iv 四半世紀前は、運動と学業優秀児が最高の健康水準を示し、続いて運動優秀児と学力優秀児が同一水準にあったが、現在では運動優秀児よりも学業優秀児の水準が向上している。

v しかし、その他の児童よりも健康水準は高く、学業に加えて運動の優秀な児童が最高の精神的健康水準を保つ点は変わらなかった。

3) 環境的要因の影響が強い発達特徴

i 進学競争を体験する児童は明らかにプレッシャーを受け、5年次に不調徴候が拡大した。

ii プレッシャーを受けても高健康児は安定し、健康水準の低い児童は不調徴候が拡大した。

7 おわりに

大学の春秋は実に早く巡る。講義、実習、部活、会議の合間に研究テーマを追いかける。気付いたら定年が一月後に迫っていた。研究分担者に声をかけたのは、シドニーオリンピックが終了した直後。関西体育心理研究会は33年の足跡を残すが、年6回は顔を合わせる仲間たちにもちかけた。教育系大学から4名、UK研究会から2名の体育学会体育心理専門分科会員が、快く協力してくれた。オリンピックサポートから今少し早く足を洗えたら、ここまで切羽詰まらなかった。しかし、それもUK法における人間理解を根底に置いたメンタルサポートだったので、断れなかった。体育学会の社団法人化が最終段階だったため、自粛要請を受けて予算を1/3に縮小したことも痛かった。3年間の「まとめ」にギリギリまで時間に追われ、各方面に迷惑をかけた点をお詫びしたい。

振り返ると本研究の始まりは、現場の教育実践

にUK法を適用する機会が与えられてからであった。切掛をいただいた昭和48年当時の附属平野小学校・楠本正輝教頭、宝来敏夫教務主任、亀井靖夫体育科主任以来、何代の教頭・副校長を初めとする教職員の方々に理解と協力を得たことか。四半世紀を越える継続は、その上に立って成り立つものである。歴代の校長職（教授）然り、百歳を越えんとする重田為司名誉教授の激励、昨年12月に他界された柏原健三スポーツ心理学学会名誉会員や、現体育学会の末利博・鷹野健次名誉会員からは、体育心理学研究の関西における長老として長年の薫陶を受けてきた。

独立行政法人化を目の当たりに大変な毎日を送る中で、一つの区切りとして本研究報告まで漕ぎつけたことに安堵するとともに、ご協力頂いた関係各位、並びに本学大学院修了・河野和憲非常勤講師を筆頭とする多数の院生・学部学生諸君に感謝の意を表します。

2004年3月1日

研究責任者 船越 正康 (大阪教育大学)
研究分担者 千駄 忠至 (兵庫教育大学)
和田 尚 (京都教育大学)
岡澤 祥訓 (奈良教育大学)
兄井 彰 (福岡教育大学)
大黒 敏春 (常磐会短期大学)
滝 省治 (甲子園大学)

8 参考・引用文献

穂山貞登他(1968) 創造性研究ハンドブック. 誠信書房: 東京.
浅田隆夫(1987) 序説発達教育学. 岩崎学術出版: 東京.
藤田尚吾(1997) 児童期の身心発達に関する研究—保健室利用児童を中心に. 大阪教育大学紀要. IV. 45-2, 303-315.
深谷和子(1996) 「いじめの世界」の子どもたち—教室の深淵. 金子書房: 東京.51-72.
船越正康(1984) 心身相関に関する諸問題~U-K法と児童期の心身発達に関する一考察. 日本体

育学会第35回大会号.164.

船越正康(1984) 身体活動と心のはたらき. 辻野昭他編・保健体育科教育の理論と展開. 1-4: 56-71. 第一法則.

船越正康(1985) 児童期における心身発達の法則性について~U-K法に基づく縦断的資料より. 日本体育学会第36回大会号.191.

船越正康(1993) 運動と障害—身体的ハンディキャッパー. 小学保健ニュース, 第37, 38. 子どものスポーツ心理学: 少年写真新聞社.

古市裕一他(1986) 小・中学校における「いじめ」問題の実態といじめっ子・いじめられっ子の心理的特徴. 岡山大学教育学部研究集録 71: 175-194.

古市裕一他(1989) いじめにかかわる子どもたちの心理的特徴. 岡山大学教育学部研究集録 81: 121-128.

J.M.タナー: 林正監訳(1994) 成長のしくみをとく「胎児から成人期までの成長のすずみ方」. 東山書房. 京都.177-192.

J. ブルックス・ガン: 遠藤由美訳(1985) 性別役割—その形成と発達.

花田敬一他(1970) スポーツマン的性格. 不味堂
堀内 聰(1999) 急がされる子どもたち. 児童心理.11-16. 金子書房.

今道公利(1997) 小学生の創造的態度についての研究—SPI 性格検査と学習意欲との関連を通して. 応用教育心理学研究. 13: 13-17

加賀秀夫(1989) 運動の好きな子嫌いな子. 体育科教育 37-12: 28-30.

官報第4107号(1897) 学生生徒身体規程. 文部省令第3号.

春日作太郎(1987) いじめっ子・いじめられっ子の性格と行動の特性—PSTを用いた調査をもとに. 教育心理. 35: 810-815.

春日作太郎(1995) いじめ経験・いじめられ経験と問題行動傾向および性格の関連性の検討—実態調査をもとに. 盛岡大学短期大学紀要 5: 97-101.

加藤秀俊(1963) 整理学. 中央公論社.

小林晃夫(1954) 生徒指導用・内田クレペリン精

- 神検査法による人間理解. 東京心理技術研究会.
- 小林晃夫 (1963) 身心相関に関する一考察—幼児の運動能力とパーソナリティ. 東京教育大学体育学部紀要 3:18-27.
- 小林晃夫 (1970) 内田クレペリン精神検査法による人間の理解. 東京心理技術研究会.
- 小林晃夫 (1974) 曲線型の話～人間育成の道しるべ. 東京心理技術研究会.
- 小林 剛 (1986) 最近のいじめっ子・いじめられっ子の特徴. 教育心理 34 : 28-31.
- Kraepelin, E (1896) Der psychologische Versuch in der psychiatrie, Psychologische Arbeiten, 1, 1-91.
- 松田岩男他 (1969) 児童の体格、運動能力、性格の関係について. 日本体育協会スポーツ科学研究報告 No. X III.
- 森 重敏 (1971) わが国における優秀児の心理学的研究 風間書房.
- 森 重敏 (1972) 優秀児の心理. 日文選書.
- 森 重敏 (1972) わが国における優秀児の心理学的研究. 風間書房.
- 村田光範 (1981) 小児の肥満. 医歯薬出版. 東京. 86-91.
- 村田好道 (1971) 個性能力開発教育. 城山小学校編. 東京心理技術研究会.
- なだいなだ (1997) 2 だらしなない子の心理. 児童心理. pp.1-9. 金子書房.
- 岡沢祥訓 (1979) 反応特性に関する Eysenck 理論と結果の知識の関係. 東海保健体育科学 : 1-1. 19-25.
- 大川一郎他 (1990) ACL による創造的パーソナリティ尺度の作成. 筑波大学心理学研究 12, 159-167.
- 桜林 仁他 (1984) 芸術家のパーソナリティに関する一研究—矢田部・ギルフォード性格検査に対する芸術学生の反応に現れた「創作型」と「演奏型」. 東京芸術大学芸術学部紀要 19.73-89.
- オルウェーズ : 松井養夫ほか訳 (1995) いじめこうすれば防げる. 川島書店 : 東京, 51-65.
- Olweus, D. (1993) Bullying at school: What we know and what we can do. Cambridge, MA : Blackwell.
- 杉原一昭他 (1986) 「いじめっ子」と「いじめられっ子」の社会的地位とパーソナリティ特性の比較. 筑波大学心理学研究 : 63-72.
- 杉原 隆他 (1970) 知的優秀児の運動学習に関する研究. 体育学研究 16-3.
- 桜井茂男 (1987) いじめっ子・いじめられっ子の性格特徴. 教育心理 35 : 22-25.
- スミス・シャープ : 守屋慶子他訳 (1996) いじめにとりくんだ学校—英国における 4 年間にわたる実証的研究の成果と展望. ミネルヴァ書房 : 京都. 1-32. <Smith, P. K., and Sharp, S. (1994) School bullying. London : Routledge>
- 滝省治 (1991) スポーツ適性論からみたバスケットボール選手の精神的特徴. スポーツ心理学会第 18 回大会号.
- 辻野 昭 (1974) 運動が心身機能に及ぼす影響について～児童の持久走トレーニングに関して. 川西教育委員会委託研究. 大阪教育大学紀要 23-IV. 183-193
- 常木誠司 (2002) 運動優秀児に関する研究 (1) 出現率と身体的特徴, 日本発達心理学会第 13 回大会発表論文集.
- 内田勇三郎 (1957.7) 内田クレペリン精神検査・曲線型図例集—曲線判定基準例. 標準指数値による作業量別標準作業曲線. 4, 日本精神技術.
- 内田勇三郎 (1957.8) 新適性検査法—内田クレペリン精神検査法. 日刊工業新聞社.
- 宮城音弥 (1969) 日本人の性格. 朝日新聞社.